

ダンスをうみだす源泉としての聖書

— Doug Adamsの論考を中心に —

河 田 真 理

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

ダンスをうみだす源泉としての聖書

— Doug Adamsの論考を中心に —

河 田 真 理*

The Bible as the source of Dance

: Focusing on the theories by Doug Adams

KAWATA Mari

Abstract

This article examines the role of dance created from the Bible for the human beings through the articles of “the Bible and Dance” by Doug Adams, a professor of Christianity and Arts. Many examples of dances in the Bible have been used for worshiping God and usually done in the forms of either circle dances or line dances, or both. The Biblical meaning of dance forms is to promote a sense of community, shift the attention from oneself and one’s past to others and God, and rebuild self awareness.

Also the Bible was a source of the inspiration for dance works by many modern dancers in the 20th century. Dance works were created from the bible story reflected matters of the times. In dance works reflected biblical faith, we discover biblically prophetic qualities which communicate to audiences the reality of the human beings through works.

The Bible is to be a source of the inspiration for both worship and theatrical dances, and of profound suggestion to the question of what is the role of dance for the human beings.

Key words: Bible, Dance, Doug Adams, Community, Prophetic Qualities

はじめに

現在、欧米のクリスチャンコミュニティ¹を中心に、神への礼拝として「ワーシップダンス」と呼ばれるダンスが行われている。今やその波はアジアにも伝わり、キリスト教人口が1%にも満たない日本のキリスト教会においてもそのようなダンス実践を僅かながら見ることができる。

では、ワーシップダンス、すなわち礼拝としてのダンスとはいかなるものなのか。筆者は、ワーシップダンスをうみだす源泉はダンサーたちの信仰の土台である「聖書」にあるのではないかと推察し、「聖書とダンス」に関する先行研究を調査したところ、欧米では神学者、言語学者、ダンス関係者の間で様々な視点から研究されていることが知られる⁽¹⁾。それらは、聖書における「ダンス」の語源とその形態⁽²⁾、聖書時代の宗教行事における歌唱の構造と動きのパターンに関する研究⁽³⁾、また現代のクリスチャンコミュニティにおけるダンス実践の歴史的背景・具体的な実践内容・その神学的意義について扱った研究⁽⁴⁾、さらに「キリスト教」という枠を超えた現

キーワード：聖書、ダンス、ドуг・アダムス、コミュニティ、預言的性質

*平成20年度生 比較社会文化学専攻

代振付家による聖書を題材とした作品に関する研究⁵⁾など多岐に渡る。

その中でも、議論の牽引者ともいえるべき Doug Adamsⁱⁱ⁾ (以下、Adams と表記) は、宗教と芸術の分野で学者・教授として国際的にリードする役割を担い、「聖書とダンス」に関する多くの論文及び著書を著している。そこで、本研究では彼の論考に基づき、ダンスに関する聖書に特有の理解を明らかにし、聖書からうみだされるダンス実践が人間存在にとって果たす役割について考察することを目的とする。

このことにより、「キリスト教」という領域で行われるワーシップダンスの土台となる理念を導き出すとともに、そうした枠を超えたダンスと人間の生との関わりについても新たな示唆をもたらす可能性をもつと考える。

1. 聖書における「ダンス」の意味と形態

聖書におけるダンス研究は、まず聖書の歴史資料においてダンスを明示する語に着目することから始まった。その後の研究方法の発展により、実際に踊るという行為を表すダンス (以下、「事実上のダンス」と略記) と、喜びや何らかの意味の象徴としてのダンスと、ダンスという語は使用されていないが広い意味でダンスの状況を示唆するために用いられている語とを区別するようになった。

旧約聖書において事実上のダンスを示すヘブライ語は12種類あり、新約聖書におけるギリシア語による表現では4種類あるⁱⁱⁱ⁾。Adamsは、旧約聖書における事実上のダンスを意味するヘブライ語のなかで特に重要な言葉として、「machol, mecholah, chul」(Adams, 1983: 24.以後、AdamsをAと表記)を挙げている。以下、これらの3つの言葉が用いられている聖書の記述を見ながら、各言葉が表す意味とダンス形態について考える。

“machol”は、聖書の「詩篇149篇3節」で用いられている^{iv)}。

「踊りを持って、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。(詩篇149:3)」

ここでは、タンバリンや他の楽器を伴い、神をほめ讃える行為としてのダンスを意味している。

“mecholah”は、聖書の「出エジプト記15章20節」にみられる^{v)}。

「女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを手を持って、踊りながら彼女について出てきた。(出エジプト記15:20)」

この箇所は、イスラエル人がエジプトでの奴隷生活から解放されたことを神に感謝する場面である。これは、ダンスによって女性たちの一団を率いている状況であり、“machol”と同様にタンバリンを伴いながら踊って勝利を祝い、神をほめ讃える行為としてのダンスを意味する。

“chul”はmacholやmecholahの総称語であり、円状の踊り、回転、高度に活発な動きを特徴とする^{vi)}。

以上により、これらの3つの言葉は、いずれも神をほめ讃える行為であること、他の楽器を伴って集団で踊られ、回転運動を含む活発な動きを特徴とすることが示唆された。Adamsは聖書にみる神への礼拝としてのダンスについて次のように述べる。「これらの形態はみな集団による円ダンスであり、(中略)神への礼拝においてダンスが用いられるときは、コミュニティの形態をとっていた。(中略)個人的ダンスよりもむしろコミュニティのダンスの方が神に近づくための団結した方法としてふさわしい。」(A, 1983: 24)

このように、聖書にみる事実上のダンスにおいて特に重要とされる言葉は、神を礼拝する行為を表し、それは集団で円を描き活発に踊るといった形態をとることが示唆された。このことから、集団がダンスを通してコミュニティとして一致した状態にあるということが神を礼拝することにおける重要な要素であると考察される。

2. 礼拝としてのコミュニティ・ダンスに関する聖書的意義

本章では、礼拝における「コミュニティ」「ダンス」それぞれの意義について、聖書の記述とAdamsの論から考察を行う。

1) コミュニティ意識を促すダンス形態 –円・ラインという形態から喚起される神のイメージの共有–

Adamsは、コミュニティの形態で踊られるダンスについて、まず下記の聖書の記述を取り上げ、「共に集い踊りをもって」(A, 1983: 6) 神を礼拝することの重要性について論じている。

「ハレルヤ。主に新しい歌を歌え。聖徒の集まりで主への賛美を。(中略) 踊りをもって御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。(詩篇149)」

「タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。(中略) 息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。(詩篇150)」

では、実際の礼拝において、コミュニティで踊られるダンスとはどのような意味をもつのか。Adamsは、クリスマスにキリスト教礼拝で行われる実践例をもとに、礼拝においてコミュニティで踊ることの意味について論じている。「キャロルのためのダンスステップは通常、円ダンスやラインダンスのどちらか、あるいは両方で遂行される。(中略) 円ダンスは神の内在性(immanence)を強調し、一方のラインダンスは神の超越性(transcendence)を強調する。(中略) これらの両方の形態が共同体の感覚を促進させる。それは円ダンスの円の中心であり、ラインダンスのラインの目的地点である神の存在に対して、ダンサーが自己を超越して(transcends) フォーカスすることによる。」(A, 1978: 9-10)

つまり、「円」という形態はその中心に存在する神のイメージを、また「ライン」という形態はその先頭に立つて導く神のイメージを喚起させる。このように、集う者全員がこれらの共通したイメージをもって踊り、みな心が合わせて神の臨在にフォーカスすることにより、コミュニティ感覚をより一層促進させていると考察される。

2) 人間の根源的性質への気付き –身体を介した他者とのつながり–

近年の聖書学研究によると、「dance」と「rejoice」という語はアラム語で同等の意味を表す⁽⁶⁾ことが示唆されている。Adamsは、ダンスが喜びと同意であることを示す例として、次の聖書の記述を示している。

「喜びなさい。喜びおどきなさい (Rejoice, and be exceedingly glad)。(マタイ 5:12)」

「喜びなさい。おどりがあって喜びなさい (leap for joy)。(ルカ 6:23)」

この記述にみられる、抑えきれないほどの喜び (be exceedingly glad) や跳び上がるほどの喜び (leap for joy) という表現は、溢れ出る感情に突き動かされている様子を表し、それはまさにダンスと同質であるといえるだろう。

Adamsは、ダンスが喜びと同意であるという理解について次のように論じている。「この理解(喜び=ダンス)は多くの聖書の記述や訳書に基づく理解であり、多くの賛美歌の歌詞においても一貫している。」(A, 1983: 16) さらにAdamsは、この理解に基づく賛美の在り方について次のように述べる。「人々が“喜び”や“喜べ”というような歌詞を歌うときにはある種の熱狂的な跳躍が必要である。(中略) エネルギッシュな跳躍は、神が生きて働く神であり、神は我々の身体の上半身や腕や頭のみならず、あらゆる部分を創造した方である、ということを再認識させる。」(A, 1978: 9)

つまり、エネルギッシュな跳躍や回転などの動きによるある種の「熱狂的感覚」とは、個々人の心に本来的に備わっている喜びを生起させるイキイキとした身体感覚であり、それは身体を取り囲む世界を「了解」し、世界の一部となっている状態にあると考えられる。それは、大いなる存在、すなわち世界の創造者である神を認識し、畏れる感覚に通じていると思われる。

また、Adamsは、「我々が自分自身の根源を認識することにより、それが他者においても共通した根源的性質であることを認識させる」(A, 1990c: 43) と述べる。つまり、動きを通して自分自身の肉体的性質に気付き、世界の一部となっていることを認識することは、同じ肉体的性質をもつ他者とのつながりをも認識することを含んでいる。

したがって、聖書における礼拝としてのダンスは「喜び」「つながり」の象徴である。ダンスによるイキイキとした身体感覚は、我々人間の根源的性質、すなわち我々が世界の一部であるという認識と、同じ肉体的性質をもった他者との連帯意識をもたらす。それはまさに、人間にとっての「喜び」「安心」「感謝」であり、そのような状態にあることこそ、神を礼拝する姿であると考察される。

3) 悔い改め —過去や自己への執着からの解放—

「悔い改め (repentance) とは精神の変化を意味する・・・異なる方向へ向きを変え進むこと。着目する視点を変えて新しい意図をもたらす。」(A, 1983 : 67) Adamsは、ダンスと悔い改めとの関係について、「過去への鎖は踊ることによって解き放たれ、自由にもものを見、自由に新たな意志を感じるようになる」(A, 1983 : 57)、「身体の動きはこのような視点のシフトを助ける目的がある」(A, 1983 : 71) と述べている。では、ダンスにおけるこうした理解について、聖書にはいかに表現されているのか。

Adamsは、「[ダンスにおける] このダイナミクスは、聖書における最初のダンス (出エジプト記) の記述にあらわれている」(A, 1983 : 59) と述べる。

「アロンの姉、女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを手に持って、踊りながら彼女について出てきた。(出エジプト記15 : 20)」

この箇所では、ミリアムという女性がダンスによってイスラエルの女性達を率いて、エジプトの軍隊を打ち負かし、イスラエルの奴隷生活の終焉と新たな自由を得た勝利をお祝いし、喜びと感謝の踊りを踊る場面を表す。Adamsはこの箇所から、「出エジプトにおけるダンスは奴隷と自由、また過去と未来の間における重要な分岐点として最もふさわしく、(中略) ダンスは過去の問題を忘れ自由になることにつながる」(A, 1983 : 59) と述べ、ダンスがある方向から別の方向へと心をシフトさせるように働くこと、すなわち精神の変化を伴う行為であることを主張している。

さらに、Adamsは別の聖書箇所を用いて、人間の精神の在り方について論じている。

「肉 (the flesh) の思いは死であり、御霊 (the spirit) による思いは、いのちと平安です。(ローマ 8 : 6)」

ここでいう「肉」「霊」という言葉は、「形態や物質という言葉で理解されるべきではなく (中略) 異なる側面における人間をあらわす。」⁽⁷⁾ すなわち、「肉」の思いとは「自分自身に執着する状態」であり、この状態をAdamsは、「心理学的には自意識、社会学的には自己中心」(A, 1983 : 70) と捉えている。一方、「霊による思い」とは「神に対して心を開き人生を神に委ねた状態」⁽⁸⁾、すなわち「自分ではなく、神と他者に目を向けている」(A, 1983 : 71) 状態である。したがって、悔い改めとは自己 (肉) への執着から神 (霊) へと視点をシフトすることであるといえる。

では、この過程においてダンスはいかに働くのか。Adamsは次のように述べる。「身体の動きは、心を新しい動きに関する他の思考で満たすことのないまま、先の思考から焦点をシフトさせる。(中略) ダンスにおいて心は解放され、新しい考えや新しい意図へと導かれるのである。」(A, 1983 : 71) つまり、ダンスにおける思考様式は、「思考を、意識の内部で概念を操作することと考えるのではなく、絶え間なく展開する状況を的確に把握し、予見すること」⁽⁹⁾であり、ダンスとは絶え間なく変化する状況に対して常に新たな意図を創造する行為であるといえる。したがって、Adamsはこのようなダンスの性質のうちに「悔い改め」の助けとなる性質をみていると考えられる。

さらに言えば、「自己の身体は世界の身体の一部であり、自己の運動とともに世界の身体もまた変転してゆくのである」⁽¹⁰⁾から、ダンスにおける身体の動きを通して、自己の身体が世界の身体の一部としてその「つながり」を感じることができたとき、それは自己への執着からの解放とともに、変転してゆく世界において自由に創造的な状態にあるということができる。そのような、自分自身と自分を取り巻く世界との新たな関係に気付くことこそ、悔い改めであり、「霊」による生き方であるといえるのではないだろうか。

したがって、礼拝としてのコミュニティ・ダンスの聖書の意義とは、①円やラインというダンス形態から喚起される神のイメージを共有することによるコミュニティ意識の促進、②身体をイキイキと動かすことによる人間の肉体的性質への気付きが、他者との連帯意識や神という存在への認識と敬意をもたらすこと、それゆえに、③自己への執着から解放され、神・他者とのつながりにおいて自由で創造的な認識をもつことであるといえる。

3. 聖書と20世紀モダンダンス作品

これまで、聖書においてダンスを意味する語やダンスに関する多くの記述を基に実践されてきた、礼拝としてのコミュニティ・ダンスについて、その聖書の意義を明らかにした。ところで、聖書の題材やその信条を反映したダンス作品は、「教会内で行われる礼拝としてのダンス」という領域にとどまらず、20世紀モダンダンスを代表する舞踊家の作品において数多くみられる。Adamsは、特に1920～1970年代に活躍したモダンダンサーによる作品について、幾つかの視点から論じている。本章では、Adamsの論に基づき、20世紀モダンダンス作品と聖書との関わりを明らかにし、そこから人間存在にとってダンスが果たす役割について考察する。

1) 20世紀のモダンダンス作品にみる聖書の描写と作風の変化

Adamsは、“Changing Biblical Imagery and Artistic Identity in Twentieth-Century Dance [20世紀のダンスにみる聖書の描写と芸術家の作風の変化]” (A, 1990b) において、20世紀を代表するモダンダンサー^{vii}による聖書の題材に基づいた作品について、振付家及びダンサー・選択された聖書の題材・作品内容・年代を検証している。20世紀には聖書を題材としたバレエ作品もみられたが、それらは豪華な舞台装置や衣装等への過剰なこだわり、余分な動きの多用により、聖書の登場人物の微妙な感情や物語の真理が作品に反映されにくい傾向があった。一方、Adamsは、聖書を題材とした20世紀モダンダンス作品は、同時代の社会状況を反映し、観る者に人間存在に関する新たな気付きをもたらすとしている。

そこで、ここではAdamsの取り上げた20世紀のモダンダンスを代表する振付家による、聖書の題材をモチーフとした作品を取り上げ、聖書の題材・年代・振付家・ダンサー・作品名という観点から整理し示した表1をもとに、それらの関連について年代順にみていくことにする。

表1 聖書の題材をモチーフとした20世紀のモダンダンス作品^{vii} (河田作成)

聖書の題材	分類	年代	振付家	ダンサー	作品名
『ミリアム』	人物(女)	1911	ロイ・フラー (Loie Fuller)	本人	「Miriam's Dance」
		1919	テッド・ジョン (Ted Shown)	本人	「Miriam, Sister of Moses」
『ヨセフ』	人物(男)	1914	ミシェル・フォーキン (Michel Fokine)	バレエリュス	「Josephslegend」
『詩篇 23章』	賛歌	1915/17/21	テッド・ジョン (Ted Shown)	本人	「Twenty-third Psalm」
『エフタの娘』	人物(女)	1918	ルース・セント・デニス (Ruth.St.Dennis)	本人	「Jephtah's Daughters」
『エステル』	人物(女)	1919	ルース・セント・デニス (Ruth.St.Dennis)	本人	「Dancer at the Court of King Ahasuerus」
『ノア (の大洪水)』	人物(男)	1921	ロイ・フラー (Loie Fuller)	本人	「The Deluge」
		1929	ジョージ・バレランシネ (George Balanchine)	バレエリュス	「Prodigal Son」
『放蕩息子』	例話	1931	クルト・ヨス (Kurt Josse)	本人	「Le Fils Prodigue」
		1938	デビッド・リチン (David Lichine)	本人	「Prodigal Son」
		1931	テッド・ジョン (Ted Shown)	本人	「Job, a Masque for Dancing」
『ヨブ』	人物(男)	1931	テッド・ジョン (Ted Shown)	本人	「Job, a Masque for Dancing」
		1931	ニネット・デ・ヴァロイ (Ninette de Valois)	本人	「Job」
『ダビデ』	人物(男)	1919	テッド・ジョン (Ted Shown)	本人	「David the King」
		1935	マックス・テルピス (Max Terpis)	本人	不明
		1935	キース・レスター (Keith Lester)	本人	不明
		1937	セルゲイ・リファール (Serge Lifar)	パリ・オペラ座バレエ団	「David Triumphant」
『サロメ』	人物(女)	1931	ルース・セント・デニス (Ruth.St.Dennis)	本人	「Salome」
		1931	レスター・ホートン (Lester Horton)	本人	「Salome」
『賢い女と愚かな女』	例話	1940	フレデリック・アシュトン (Frederick Ashton)	The Vic Wells バレエ団	「The Wise Virgins」
『エバ』	人物(女)	1950	ホセ・リモン (José Limón)	本人	「The Exiles」
		1958	マーサ・グラハム (Martha Graham)	本人	「Embattled Garden」
		1959	ジョン・バター (John Butler)	本人	「In the Beginning」
		1973	アルビン・エイリー (Alvin Ailey)	本人	「According to Eve」
		1973	ポール・テイラー (Paul Taylor)	本人	「American Genesis」
『デボラ』	人物(女)	1959	パール・ラン (Pearl Lang)	本人	「Song of Deborah」
『ラザロ (の甦り)』	人物(男)	1973/77	ノルマン・ウォーカー (Norman Walker)	本人	「Lazarus」
『ヤコブ』	人物(男)	1974	マーサ・グラハム (Martha Graham)	本人	「Jacob's Dream」
『キリスト (の受難)』	人物(男)	1974	ロバート・ヨーン (Robert Yohn)	本人	「The Man They Say」 「Cruciform」
		1975	マーサ・グラハム (Martha Graham)	本人	「Point of Crossing」
		1976	アルビン・エイリー (Alvin Ailey)	本人	「Three Black Kings」
		不明	ベラ・レヴィツキ (Bella Lewizky)	本人	「Pieta」

表1より、20世紀モダンダンス作品においてモチーフとされた聖書の題材は、人物・例話・賛歌に分類することができる。人物の場合、男性ではキリスト・ダビデ・ヨブ・ノア・ヨセフ・ヤコブ・ラザロ、女性ではミリアム、エバ、サロメ、エステル、デボラ、エフタの娘が取り上げられている。キリストが語った例話では、「放蕩息子」「賢い女と愚かな女」、また、神への賛歌では「詩篇23章」が取り上げられている。

1910年代には、モダンダンスの開拓者といわれるロイ・フラーやルース・セント・デニス、テッド・ショーンによる作品がみられる。ロイ・フラーの『Miriam's Dance [ミリアムの踊り]』(1911)は聖書を題材としたどの作品にも先だって踊られ、続く「ルース・セント・デニスやテッド・ショーンは宗教的な主題を自分達のダンスの焦点として公然と打ち出し、(中略)ヘブライ文化やキリスト教の聖書的テーマに関わるおびただしい数のダンスを紹介した。」(A, 1990a: 4) Adamsは、テッド・ショーンの『David the King [ダビデ王]』(1919)について、「正義が恵からの脱落と崩壊のためだけの力になっていくというテーマがアメリカ権力に対する鋭い批評となった」(A, 1990a: 4)と述べている。

1920年代後半～1930年代初頭にかけては、『Job [ヨブ]』や『Prodigal Son [放蕩息子]』をモチーフとした作品がジョージ・バランシンやクルト・ヨースにより創作された。『Job』は人間社会に存在する神の裁きと、正しい人でさえも困難に遭うという「義人の苦難」を扱い、『Prodigal son』は神に逆らっていた罪人をも迎え入れる神の愛について扱っている。「そうしたテーマは憂鬱な時代にふさわしいものであった。」(A, 1990a: 5)

1930年代後半には『David the King [ダビデ王]』に関する作品が多くみられ、スイスやロンドン、パリにて様々なバージョンで上演された。「これらの作品で強調されていることは、(中略)王としてのダビデの後世よりも、ゴリアテ[敵国軍の長]を倒したダビデの勝利を強調していることである。そうした作品は第二次世界大戦への兆しとなった。」(A, 1990a: 5) Adamsはさらにこの点について、「ゴリアテの軍事力や準備への怠慢はまさにドイツがその実証例であり、一方他の西洋諸国はほとんど〔軍事的な〕準備をしていなかったダビデに相当する」(A, 1990a: 5)と考察している。

また、1940年代に起こった第2次世界大戦により、「戦争の結果として社会における女性の地位が向上したことは、選択されるダンステーマに反映されている。」(A, 1990a: 5) この時代の例として、まず、妖艶な美しさで聖者を死に至らしめた『Salome [サロメ]』があげられる。また、罪によりエデンの園を追放されたエバに関する描写は、ホセ・リモンの『The Exiles』(1950)、マーサ・グラハムの『Embattled Garden』(1958)、そしてジョン・バトラーの『In the Beginning』(1959)にみられる。このように、「政治的、また文化的生活における女性の役割が明らかになったことは、1950年代のダンスの前兆となり、1960年代初頭まで重要視され続けた。」(A, 1990a: 7)

1970年代に続いた暴力や政治的暴動は、「受難」をモチーフとしたダンス作品として、ロバート・ヨンによる『The Man They Say』(1974)や『Cruciform』(1974)、マーサ・グラハムの『Point of Crossing』(1975)を含む多くのダンス作品を通して探求された。同時に命が助かることやよみがえりに関するテーマを扱った作品もみられた。

このように、20世紀モダンダンス作品において、聖書は単なる歴史物語としてではなく「振付家が生きる現在」を表現するためのモチーフとして用いられ、それは時代への鋭い批評として、また次に起こる事象への予兆として機能しうる可能性をもつことが明らかになった。

ところで、Adamsはこうしたモダンダンス作品のうちに、「ある強い預言的な霊 (a strong prophetic spirit) をみることができる」(A, 1990a: 3)と述べている。次項において、モダンダンス作品にみる「預言的性質」について、Adamsの論に基づき考察を行う。

2) 聖書の信条を反映したモダンダンス作品にみる「預言的性質」

Adamsは、“Biblical Criteria in Dance: Modern Dance as Prophetic Form [ダンスにおける聖書の領域：預言的形態としてのモダンダンス]” (A, 1992b)において、真に「聖書的」すなわち「聖書の信条を反映した」モダンダンス作品にみる「預言的性質」について論じている。

真に「聖書的」な芸術表現とは何か。Adamsは礼拝説教や書籍において、聖書的な文章は引用しているが本質的には聖書の信条を反映していないものがある一方、聖書的な文章は一切用いていないが聖書の信条を反映し

ているものもあることをモダンダンス作品に関連させて次のように述べている。「どんなモダンダンスもその中心的題材が特別に聖書的であるか否か、振付家が聖書の価値観を肯定しているか否かに関わらず、聖書に基づく確信や価値を反映している。なぜなら、モダンダンステクニックや振付には、聖書の物語に並ぶ預言的要素があるからである。」(A, 1992b: 14) つまり、聖書を作品の中心的題材として用いているか否か、また聖書の価値観を肯定しているか否か等ということは関係なく、モダンダンスそのものの内に聖書の物語と同等の「預言的性質」がみられるということである。

Adamsは、マーサ・グラハムやドリス・ハンフリーらの創作への取り組みをたどりながら、モダンダンスにみる「預言的性質」について次のように述べている。「1920年代、1930年代、1940年代のモダンダンスは、1950年代、1960年代、1970年代初期のダンスに比べて根本的に預言的性質がより明確である。マーサ・グラハムやドリス・ハンフリー、マリー・ヴィグマンといった初期モダンダンスの振付家たちは感情的な動機や人間のコミュニケーションを重要視した。(中略) 彼らは、真正なる人間の日常の経験をアーティストの創造の元となる重要な材料と見なし、それぞれの相が持つ意味について関心を抱いていた。聖書の登場人物やストーリーと同様に、ハッピーエンドには重要性を置かなかった。」(A, 1992b: 15) つまり、初期モダンダンサーたちは「永遠なる漠然とした存在をみようとするのではなく、人間の状況における人間を見つめ」(A, 1992b: 15)、現実をリアルにあるがままに表現した。「これらの振付家たちのダンスを通して我々は、曖昧さや人間味あふれたおかしさ、悲しみや不合理なものを読み取り、こうした現実を通して日常の人間の経験の中に真実を見つけることができる。こうして物事があるがままに捉えることはモダンダンスにおける預言的声、聖書の基準の一部であるといえる。そうしたダンスを観るにより、観衆は自分達自身のある部分をリアルに見つめ、人間とは何かという問いへの真実の一部分を聴くことができる。」(A, 1992b: 15)

マーサ・グラハムが呼吸という行為における動きの始まりを発見し、ドリス・ハンフリーが人間の身体を取り囲む世界—空間、重力に関わる人間の身体についての発見から新しい動きをうみだしたことは、まさに日常の人間の経験における真実の発見であり、その新しい表現は観る者に新たな気付きを与えた。聖書の登場人物も、現在を生きる我々と全く同じように苦難や罪による葛藤の人生を歩んでいる。聖書は、その状況においてリアルに働かれる神とその人物との関係を、漠然とした空想話ではなく現実的な事象として描き、聖書を味わう者がその事象を自分自身の人生に適用して受け止めるときに常に新しい気付きを与える書物であると筆者は考える。したがって、Adamsの述べるモダンダンスにみる「預言的性質」とは、振付家自身が現実を見つめ、内なる経験と深く対話することにより見出した真実が、作品を通して観る者を刺激し新たな気付きを与える性質であると考察される。

また、「預言的性質」に関するテクニカルな要素についてAdamsは次のように論じている。「預言的で我々に衝撃を与えたダンス作品は、幾つかのテクニカルな要素をもつ。それは衝撃的な動き、身体の内軸、フォールトリカバリー、床、非対称、そしてユーモアを操作することにより、人間存在の現実に対して緊張感を与える。こうした要素は、(中略) 我々を驚かせ衝撃を与え、我々のものの見方を再び深め、広げる必要を感じさせる。」(A, 1992b: 15) Adamsは、このような作品の例として、トワイラ・サーブの“Sue’s leg”をあげている。「あらゆるダンサーが流れるような動きを試みるが、サーブは“Sue’s leg”においてそれをあるユニークな方法で達成している。(中略) ダンサーは出会い、くっつき合い、互いに跳びはねたりゆさぶったりして、お互いの動きの流れによってエネルギーを与え受ける。(中略) それは我々に、リアルな身体—興奮し、動き、遊び、疲れる—を提示する。彼女のユーモアにより、観客は一体感を味わう—我々はみなここに一つになっているという感覚。」(A, 1992b: 15)

したがって、作品の動きや構成におけるテクニカルな緊張感が観客に衝撃を与え、「互いの関係について見つめさせ、また自分自身の潜在的な面と出会い認識させる」(A, 1992b: 17)、すなわち観客に対して他者との関係性における新たな自己認識をもたらす。

したがって、モダンダンス作品にみる「預言的性質」とは、漠然とした空想や宗教理念を反映させることではなく、反対に我々人間が生きる現実世界—身体、空間、時間、他者—と深く対話することにより見出された新たな気付きであり、それを動きや構成に反映させることにより、観る者に緊張感と衝撃を与え、自分自身や人生について新たな認識をもたらすものであるといえるだろう。

4. 結論

これまでみてきたように、聖書におけるダンスの多くは神への礼拝に用いられ、個人ではなく「集団」で円やラインの形態をつくり「踊る」ということが、礼拝を構成する重要な要素であった。その聖書の意義について Adams の論考に基づいて考察を行ったところ、次の3点に集約された。①円やラインというダンス形態から喚起される神のイメージを共有することによるコミュニティ意識の促進、②身体をイキイキと動かすことによる人間の肉体的性質への気付きが、他者との連帯意識や創造主としての神への認識と敬意をもたらすこと、③自己への執着から解放され、神・他者とのつながりにおいて自由で創造的な認識をもつことである。これらは、ワーシップダンスを実践する上で、聖書の根拠となりうる。

また、聖書の題材や信条を反映した20世紀のモダンダンス作品に関する Adams の論考から、20世紀モダンダンス作品において、聖書は「振付家が生きる現在」を表現するためのモチーフとして用いられ、時代への批判や予兆として機能していたこと、また真に聖書の信条を反映している作品にはその題材が聖書に関連しているか否かは関係なく、その作品形式のうちに聖書の物語と同様の「預言的性質」がみられることが示唆された。その「預言的性質」とは、我々人間が生きる現実世界と対話し深くみつめることにより見出された新たな気付きであり、それを動きや構成に反映させることにより、観る者に緊張感と衝撃を与え、自分自身や人生について新たな認識をもたらすものであった。この性質は、聖書を深く味わうときに得られる人間存在に関する新たな気付きと同質であり、人間存在にとってダンスが果たす役割を考える上で重要な側面であると考えられる。

したがって、ダンスをうみだす源泉としての聖書とは、「キリスト教」のワーシップダンスを実践する上での土台であるとともに、そうした枠を超えてダンサーにインスピレーションを与え、人間の生とダンスの関わりを考える上で奥深い示唆をもたらす源泉であるといえよう。

今回は、Adams の論考から、ワーシップダンスをうみだす源泉となる、ダンスに関する聖書に特有の理解を明らかにし、また、聖書に基づくモダンダンス作品の機能と性質をみることにより、人間の生とダンスとの関わりについて考察してきた。今後は、聖書を源泉としたダンス実践について、結果としての作品に加えて、ワーシップダンスの実践過程を捉えるために実施した3件のキリスト教コミュニティ^xのダンス実践に関するインタビュー調査から得られたダンサーの語りから、ダンサーが聖書のどの部分をどの様に捉えてダンス実践の土台としているか、また神への信仰がダンス創作や実際の動きの中でどのように体験されているのか、に焦点をあてて検証する。このことにより、ワーシップダンスの実態と特性を明らかにし、人間存在とダンスの関わりについて探求を進めることを課題とする。

註

i 本稿における欧米のキリスト教コミュニティとは、白人系と黒人系の両方のキリスト教コミュニティをさす。

ii 1974年、Graduate Theological Union (GTU) にて神学の博士号を取得。教授としての経歴は1976年にPacific School of Religion (PSR) にて始まり、31年間キリスト教の教授を務め、GTUの「芸術と宗教」の分野で博士課程の教授を務めた。その他、アメリカ西海岸地方の礼拝環境の改革などを実践的に行った。

(PSR公式サイトより。http://www.psr.edu/news/doug-adams-pioneering-professor-religion-and-arts-dies)

iii 河田真理 (2007) 「キリスト教プロテスタント礼拝のワーシップダンスにみる聖性」お茶の水女子大学修士論文：23-28.

iv 同書：24.

v 同書：23.

vi 同書：23.

vii ロイ・フルー (Loie Fuller)、ルース・セント・デニス (Ruth St. Denis)、テッド・ショーン (Ted Shawn)、マーサ・グラハム (Martha Graham)、ホセ・リモン (José Limón)、ポール・テイラー (Paul Taylor) 等

viii Adams, D. (1990a) "Changing Biblical Imagery and Artistic Identity in Twentieth-Century Dance", *Dance As Religious Studies*: 3-14.

ix キリストが捕えられ、裁判にかけられ、十字架に架けられたこと。(広辞苑)

x 1件目はブラックアメリカンのキリスト教会、Glory Christian Fellowship Internationalにおけるワーシップダンスイベントであり、

2件目はクリスチャンのコンテンポラリーダンスカンパニーである、Springs Dance Company (英) のワークショップ、3件目は国際的なクリスチャンダンス組織、International Christian Dance Fellowshipが主催するワークショップである。

文献

- (1)・Adams, D. & Apostolos-Cappadona, D. eds (1990) *Dance as Religious Studies*: The Crossroad Publishing Company, New York.
 - ・Adams, D. (1990b) "Sources for the Study of Dance and Judaism and Christianity", *Dance As Religious Studies*: 213-221.
 - ・Adams, D. (1992a) "From Critical Categories of Dance in the Bible and Choreography in Worship", *Choreography and Dance*: 89-95.
- (2)・Adams, D. (1990c) "Communal Dance Forms and Consequences in Biblical Worship", *Dance As Religious Studies*: 35-47.
 - ・Mayer I. Gruber (1990) "Ten Dance-Derived Expressions in the Hebrew Bible", *Dance as Religious Studies*: 48-66.
- (3) Hoeckman, Olaf. (1987) *Dance in Hebrew Poetry*, The Sharing Co.
- (4)・Adams, D. ed. (1978) *Dancing Christmas Carols*: Resource, Saratoga.
 - ・Adams, D. (1983) *Congregational Dancing in Christian Worship*: Sharing Co., Austin.
- (5)・Adams, D. (1990a) "Changing Biblical Imagery and Artistic Identity in Twentieth-Century Dance", *Dance As Religious Studies*: 3-14.
 - ・Adams, D. (1992b) "Biblical Criteria in Dance: Modern Dance as Prophetic Form", *Choreography and Dance*: 13-18.
 - ・Cohen, S.J. (1965) *The Modern Dance: Seven Statements of Belief*, Wesleyan University Press.
- (6) Silberling, Murray. (1995) "*DANCING FOR JOY—A Biblical Approach to Praise and Worship*", America: 22.
- (7) John A.T. Robinson. (1963) "*The Body: A Study in Pauline Theology*", London: 17.
- (8) 同書 : 19.
- (9) David.M. レヴィン・R.コーブランド著、尼ヶ崎彬編訳 (1988) 『芸術としての身体』 勁草書房 : 29.
- (10) 同書 : 29.